

タイトル：自由間接話法とは何か

著者：平塚 徹

要旨：

自由間接話法は、間接話法の伝達節を削除したのも、(自由)直接話法と間接話法の両方の性質を併せ持つものでもない。むしろ、自由間接話法は、簡単に言うならば、自由直接話法の人称や時制を語り手の立場から選択しなおしたものである。それにより、登場人物の発話や思考を語りの中に断絶なく取り込むことができる。しかし、話法は截然と区別できるものではなく、自由間接話法も他の話法と連続的である。

自由間接話法の幾つかの問題についても論じ、以下のことを述べた。

- ① まとめられた自由間接話法は、引用一般に見られる引用者によるまとめと同様のものと考えられる。
- ② 「二声仮説」と「語り手不在説」の対立は、「語りかけてこない語り手」を想定することによって、捉え直される可能性がある。
- ③ 知覚の自由間接話法は映画やマンガの視線つなぎと共通の基盤を有すると考えられる。
- ④ 知覚を述べるのに、フランス語の単純過去は排除されないし、英語やドイツ語にも時制形式やアスペクトに関して決定的な制約は無い。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

平塚徹 (2017)「自由間接話法とは何か」平塚徹 (編)『自由間接話法とは何か—文学と言語学のクロスロード』東京：ひつじ書房, pp.1-48.

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

## 自由間接話法とは何か

平塚 徹

### 1. はじめに

話法とは、他人や過去の自分などの発話を提示する方法のことである。これには複数の方法があるが、直接話法と間接話法が代表的なものである<sup>1</sup>。

直接話法とは、英語なら(1)のようなものである。

#### (1) John said, “I am sick”.

ジョンは、「私は病気だ」と言った。

ここでは、John said (ジョンは言った) という「伝達節」の後に、ジョンの発話が引用符に挟まれて引用されている。伝統的には、直接話法においては、発話がもともとの形のまま引用されるとされてきた。しかし、直接話法は元の発話の再現であるどころか、実際には、引用者によって言い換えられたり、作り出されたりしている (Tannen, 1989: 98-133; Clark and Gerrig, 1990: 795-800, Fludernik, 1993: 409-414; 鎌田, 2000: 51-84; 藤田, 2000: 146-178)。しかしながら、エラー! 参照元が見つかりません。)において一人称代名詞や現在時制を用いているのは、発話時点での発話者の立場からの選択である。つまり、直接話法とは、発話者の立場に立った表現形式で発話を提示するものである。

これに対して、間接話法においては、発話は引用者の立場から言い直される。エラー! 参照元が見つかりません。)を間接話法にすると、次のようになる。

#### (2) John said that he was sick.

ジョンは自分は病気だと言った。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

ここでは、伝達節 **John said** の後に従属接続詞 **that** と伝達内容を表す従属節すなわち被伝達節が来ている。直接話法と比べると、一人称代名詞 **I** は三人称代名詞 **he** に、現在形は過去形になり、引用者の立場から言い換えられている。いわゆる「話法の転換」と呼ばれる操作である。

直接話法と間接話法が話法の二つの基本形と言っても良いが、いずれにしても、**John said** のような発話があったことを明示する伝達節がある。しかし、この伝達節を欠いているとされる話法がある。**エラー! 参照元が見つかりません。**)の直接話法と(2)の間接話法に対して、次のように伝達節がないにもかかわらず、ジョンが言った内容として理解される場合である。

(3) **I am sick.**

私は病気だ。

(4) **He was sick.**

彼は病気だった。

(3)のように、直接話法の被伝達節が伝達節なしで出てきている場合を自由直接話法と呼ぶ。それに対して、(4)のように、伝達節なしで、間接話法と同じように人称や時制が引用者の立場から言い換えられている場合を自由間接話法と呼ぶ。

自由間接話法の例を文脈付きであげる。

(5) **The MP for Liverpool asked whether further consideration could be given to the Bill. What provision had the Minister given for the unemployed?** (Wales, 1994: 4298)

リバプール選出の国会議員は議案にさらなる考慮を払うことはできるかと問うた。大臣は失業者にどのような支援を与えたのか。

ここでは、リバプール選出の国会議員が問うた内容を表す間接話法の疑問文

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

の後に伝達節のない疑問文が出てきている。この疑問文は、伝達節がないにもかかわらず、やはり、リバプール選出の国会議員が問うた内容として理解される。時制は、引用者の立場から選択されている。

次はフランスの作家ウェルベックの小説『服従』の一節である（角括弧内は英訳である）。

- (6) 1« Tu as faim ? » demandai-je pour dissiper le malaise, 2non elle n'avait pas faim mais on finit toujours par manger.

(Houellebecq, *Soumission*)

[1'Are you hungry?' I asked to smooth things over. 2No, she wasn't hungry, but we always ended up eating.

(Houellebecq, *Submission*)]

1「おなかすいているかい」私は気まずさを打ち消すために尋ねた。2いや、彼女はおなかはずいていなかった、しかし、それでも結局は食事をした。

下線部 2 は「彼女は答えた」という伝達節がないにもかかわらず、下線部 1 の質問に対する彼女の返事「いいえ、おなかはずいていないわ」を表しているものと解釈される。ここでは、人称と時制が語り手の立場から言い換えられている。

次はフランスの作家トゥーサンの小説『浴室』からの例である。

- (7) 【私は恋人とヴェネツィアにいたが、彼女に怪我をさせてしまった。彼女はパリに戻り、私はヴェネツィアに残った。しかし、しばらくしてから私もパリに戻り、空港から恋人に電話した。彼女はウィークエンドをどう過ごしたかを話した。】

1Je demandai si je pouvais rentrer. 2Oui, si je voulais, je pouvais rentrer.

(Toussaint, *La Salle de bain*)

[1I asked if I could come home. 2Yes, if I wanted to, I could come

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

home. (Toussaint, *The Bathroom*)]

1 私は帰っていいか尋ねた。2 うん、私がそうしたいのなら、帰ってよ  
かった。

下線部 2 は、下線部 1 の質問に対する彼女の返事「ええ、そうしたいなら、帰っていいわよ」を表していると解釈される。

しかし、この自由間接話法は、小説においては、発話よりも思考を表すのに用いられる。次はダン・ブラウンの小説『天使と悪魔』からの例である。

(8) The church was quiet, the thick stone walls blocking out all hints of the outside world. As they hurried past one chapel after the other, pale humanoid forms wavered like ghosts behind the rustling plastic. *Carved marble*, Langdon told himself, hoping he was right. It was 8:06 P.M. Had the killer been punctual and slipped out before Langdon and Vittoria had entered? Or was he still here? Langdon was unsure which scenario he preferred.

(Brown, *Angels & Demons*)

教会は、厚い石壁が外の世界の気配を全てさえぎっていて、静かだった。次の礼拝堂を急いで通り過ぎるとき、カサカサと音を立てるビニールの後ろで白っぽい人の形が幽霊のように揺れた。大理石の彫刻だ、ラングドンは自分が正しいことを願いながら自分に言った。午後 8 時 6 分だった。殺人者は時間を守って、ラングドンとヴィクトリアが入る前にこっそりと出て行ったのだろうか。それとも、まだここにいるのだろうか。ラングドンはどちらの筋書きがいいか確信がなかった。

下線部は、「ラングドンは思った」のような伝達節がないにもかかわらず、ラングドンの思ったこととして解釈される。つまり、思考が自由間接話法で表されているのである。

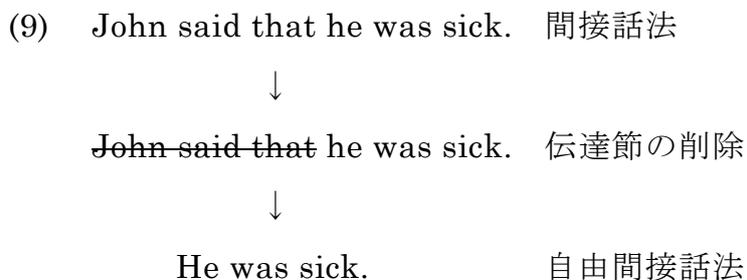
「自由間接話法」は、さまざまな名称で呼ばれてきた。フランスのバイイ

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(Bally, 1912) は、style indirect libre (英語にすると free indirect style) と呼んだ。しかし、discours indirect libre (英語にすると free indirect discourse) という言い方も行われている。英語圏では、free indirect discourse/speech/style という呼称もあるが、イエスペルセン (Jespersen, 1924) の represented speech (描出話法) という呼称も使われている。一方、ドイツ語圏では、erlebte Rede (体験話法) という用語が定着している。

「自由間接話法」という名称は、「間接話法」が伝達節から「自由」になったものという命名である。このため、間接話法から自由間接話法を派生する次のような操作が想定されるかもしれない。



しかし、自由間接話法は、間接話法の伝達節を省略したものではない。また、自由間接話法を規定するのに、間接話法を参照することも適切ではない。本稿では、まず、このことを見ていき、自由間接話法が何かということを考える。それから、自由間接話法に関する幾つかの問題を取り上げる。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では、自由間接話法がその名称にもかかわらず、伝達節のない間接話法ではないことを見る。第3節では、思考を伝える話法には、思考を言語に見立てるメタファーが関与しているという見方を提案する。そして、話法の全体像を概観し、その中に自由間接話法を位置付ける。第4節では話法の連続性について見る。第5節では、自由間接話法の幾つかの問題について見る。最後に、第6節で本稿をまとめる<sup>2</sup>。

## 2. 自由間接話法は「自由間接話法」ではない

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

本節では、自由間接話法が、その名称にもかかわらず、伝達節のない間接話法ではないことをみる。まず、2.1 では、自由間接話法は間接話法の伝達節を省略したものではないことを見る。次に、2.2 では、間接話法が言語によってさまざまであることを見る。それを踏まえて、2.3 では、自由間接話法を直接話法と間接話法に基づいて規定するのは不適切で、むしろ直接話法と語りに基づいて規定するべきであることを論じる。

## 2.1. 自由間接話法は間接話法の伝達節を省略したものではない

自由間接話法では、間接話法の被伝達節には見られない現象が見られる。これは、基本的には、伝達内容が自由間接話法では主節に現れるのに対して、間接話法では従属節に現れることによっている。

Banfield (1982: 71-75) は、自由間接話法で見られる現象として、疑問文の倒置、話題化、右方転移、感嘆文、反復やためらい、不完全な文、呼びかけ、方言など、さまざまなものを挙げている。例えば、(10)の自由間接話法では疑問文の倒置が見られる。

(10) The way to the Regent's Park Tube station – could they tell her the way to Regent's Park Tube station – Maisie Johnson wanted to know.

(Woolf, *Mrs Dalloway*, in Banfield, 1982: 72)

リージェント公園駅への道—地下鉄のリージェント公園駅への道を教えていただけますか—メイジー・ジョンソンは尋ねた。

Banfield は、このような倒置は直接話法では可能だが、間接話法では不可能だとしている。

(11) 'Can you tell me the way to Regent's Park Tube station?' inquired Maisie Johnson. (Banfield, 1982: 28)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

「地下鉄のリージェント公園駅への道を教えていただけますか」メイジー・ジョンソンは尋ねた。

(12) Maisie Johnson inquired whether

{ \*could they tell her the way ... }  
{ they could tell her the way ... } (ibid.)

次は、話題化の例である。

(13) Absurd, she was – very absurd.

(Woolf, *Mrs Dalloway*, in Banfield, 1982: 72)

とんでもない人だわ、彼女は一本当にとんでもない人。

(14) ‘Absurd, she is,’ Clarissa insisted. (Banfield, 1982: 29)

「とんでもない人だわ、彼女は」とクラリッサは主張した。

(15) Clarissa insisted that { \*absurd, she was. }  
{ she was absurd. } (ibid.)

同様に、右方転移の例である。

(16) For they might be parted for hundreds of years, she and Peter;

(Woolf, *Mrs Dalloway*, in Banfield, 1982: 72)

というのは、何百年も離れ離れになっていたかもしれないもの、ピーターとは。

(17) She replied, ‘We may be parted for years, I and Peter.’

(Banfield, 1982: 30)

「何百年も離れ離れになっていたかもしれないもの、ピーターとは」と彼女は答えた。

(18) \*She replied that they might be parted for years, she and Peter.

(ibid.)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

もつとも、4.3 で見ると、Banfield が間接話法に現れないとした現象が、実際には間接話法に出てくることがある。しかし、これらの現象は、本来、直接話法のものであることは変わらないと考えられる。このことから、自由間接話法は間接話法の伝達節を省略したものではないと考えられる。

そこで、自由間接話法は、間接話法と（自由）直接話法の両方の性質を有するものという考え方が出てくる。具体的には、人称や時制については間接話法のように語り手の立場から選択されるのに対して、統語的には（自由）直接話法のように主節として振舞うという考え方である。しかし、このように間接話法を参照して自由間接話法を規定するのには問題がある。なぜなら、間接話法のあり方は言語によって異なるからである。

## 2.2. 間接話法は言語によってさまざまである

間接話法といっても、そのあり方は言語によって異なる。まず、「話法の転換」が英語と同じように行われるとは限らない。例えば、ロシア語では「時制の一致」が起きない<sup>3</sup>。以下の例では、(19)の直接話法を(20)の間接話法に転換している。

(19) Džon skazal: 'Ja ujdú zavtra' (Comrie, 1985: 109)

John said I will leave tomorrow

ジョンは「私は明日発つ」と言った。

(20) Džon skazal, čto on ujdut na sledujuščij den' (ibid.)

John said that he will leave on following day

ジョンは翌日発つと言った。

ここでは、一人称代名詞 ja（私は）が三人称代名詞 on（彼は）に、時間表現の zavtra（明日）が na sledujuščij den'（翌日に）に転換されているが、動詞は一人称の ujdú から三人称の ujdut に変わっただけで、時制は変わっていない。これは、ロシア語が過去から見た未来（過去未来）を表す would leave

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

のような形式を有していないことと連動している。同じように過去における過去（大過去）を表す形式もないので<sup>4</sup>、間接話法でも直接話法と同じ過去形を用いる。ロシア語と同様に時制体系が単純化したチェコ語も、間接話法で時制の一致をしない（石川, 1996: 143-144; 金指, 2010: 199）。もっとも、以下で見るとおり、ロシア語やチェコ語ほど時制体系が単純化していなくても、間接話法において時制の一致が見られない言語もある。

間接話法であることを示す形式もさまざまである。英語では、従属接続詞や時制によって間接話法であることが表示されるが、言語によっては動詞の法や語順も使われる。

ドイツ語は、さまざまな間接話法の様相を呈する。大きく分けて、従属接続詞を用いる場合と、用いない場合がある。従属接続詞を用いる場合には、被伝達節の語順の変更を伴う（語釈にある「繫辞」とは、英語の *be* 動詞に対応するものである）。

(21) Er sagt, dass er krank sei.

彼は言う.3.単 従属接続詞 彼は 病気の 繫辞.接続法第 I 式.3.単  
彼は病気だと言っている。

ドイツ語の基本語順は主節では **SVO** であるが、従属節では動詞が後置されるという規則がある。従属接続詞を用いた間接話法では、被伝達節は従属節としてこの規則に従い、動詞が後置される。よって、間接話法であることを示すのに、語順も利用されていると言える。また、間接話法の被伝達節では、動詞は接続法第 I 式という形式を用いるのが基本である。よって、この動詞の形態も間接話法であることを示すのに用いられていると言える。もっとも、被伝達節の内容を確信していれば直説法を、疑っていれば接続法第 II 式という形式も用いられる（ただし、接続法第 I 式が直説法と区別がつかない場合に、接続法第 II 式を使うという場合もある）。

(22) Er sagt, dass er krank ist.

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

繫辞.直説法.3.単

(23) Er sagt, dass er krank wäre.

繫辞.接続法第Ⅱ式.3.単

他方、従属接続詞を用いない間接話法においては、従属節がそのまま並置される。この場合、(21)から(23)の文は、それぞれ、以下のようになる。

(24) Er sagt, er sei krank.

(25) Er sagt, er ist krank.

(26) Er sagt, er wäre krank.

従属節の定動詞は、通常の規則に従わず、主節と同じ語順を取っている。つまり、従属接続詞を用いる場合ほど、被伝達節が従属節らしくなく、主節の性質も持っているのである。

また、ドイツ語の間接話法は時制の一致をしない。上で見たように、ロシア語の間接話法も時制の一致をしないが、それは過去未来や大過去を表す形式が存在しないことと連動していた。しかし、ドイツ語にはそれらを表す形式が存在しているにもかかわらず、時制の一致をしない。過去未来や大過去を表す形式が存在しないことが、時制の一致をしないことの必要条件ではないのである。

ラテン語では、被伝達節に不定詞句が使われる。不定詞の主語は対格に置かれる。

(27) Cicero            dixit                    eum        sibi

キケロ.主格 言う.現在完了.3.単 彼.対格 自分.与格

maledixisse.

(Woodcock, 1959: 24)

誹謗する.完了不定詞

キケロは彼が自分のことを誹謗したと言った。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

不定詞句は従属節であるから、この形式が間接話法であることを示すのに用いられていると言える。また、被伝達節において主節の主語と同一指示であることを表すのに再帰代名詞が用いられている。これは、伝統文法では、同一節内の主語と同一指示であることを表す **direct reflexive pronoun** (直接再帰代名詞) と区別して、**indirect reflexive pronoun** (間接再帰代名詞) と呼ばれてきた。言語学ではこのような機能を持つ代名詞を **logophoric pronoun** (話者指示代名詞) と呼ぶ<sup>5</sup>。ラテン語では再帰代名詞が話者指示の機能も兼ねているが、話者指示専用の代名詞を有する言語も存在している (Hagège, 1974; Clements, 1975)。

英語と同じような形式の間接話法を有する言語であっても、細かな差異が見られる<sup>6</sup>。例えば、フランス語の間接話法では、従属接続詞の後に、英語の **yes** や **no** に相当する **oui**、**non** が現れる (Jespersen, 1924: 299; Fludernik, 1993: 148)。

(28) Il dit que {oui / non}  
彼は言う.直説法.3.単 従属接続詞 はい いいえ

これを英訳する場合、**He says that yes/no** とはならず、**He says {so / not}** となる。

間接話法といっても、言語によって、また、個別言語の内部においても、その形式はさまざまである。間接話法は発話を引用者の立場から言い換えているが、全てを言い換えるとは限らない。人称あるいは時と場所の表現は変換しても、時制は変換しない言語もある。また、間接話法では発話内容が従属節で表されるわけだが、それがどこまで従属節らしいかには程度の差があり、主節の特徴の一部を示す場合もある。このことは、直接話法と間接話法は、根本的には、必ずしも截然と別れるものではなく、むしろ連続したものであることを示唆している。

古典ギリシア語や聖書ギリシア語においては、従属接続詞の後に直接話法が現れることがある。次の例は、ギリシア語聖書の『マルコによる福音書』

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

第1章第37節からの引用である。

(29) λέγουσιν αὐτῷ ὅτι Πάντες ζητοῦσιν σε.

彼らは言う 彼に と 皆が 探している あなたを  
彼らは彼に「皆があなたを探している」と言う。

ここでは、シモンとその仲間がイエスに「皆があなたを探している」と言う場面である。本来は間接語法を導く従属接続詞の後であるにもかかわらず、イエスのことを「彼を」ではなく、「あなたを」としている。同じような例は、同書同章第40節にも現れる。このような語法は、ヘロドトスから始まり、くだけた文体とされている (Smyth, 1956: 584)。ロシア語においても、やはり、従属接続詞の後に直接語法が現れる場合があり、*полупрямая речь* (半直接語法) と呼ばれている (新井, 2001: 73) <sup>7</sup>。このような場合は英語にもある。

(30) she thought that peradventure he will fight for me.

(Tennyson, *Idylls of the King*, in Jespersen, 1924: 299)

彼女はもしかしたら彼が私のために戦ってくれるかもしれないと思った。

このような例を見ると、直接語法と間接語法の境界は曖昧なものであると思われる。この連続体の上に、間接語法の形式が、直接語法とどこまで明確に区別できる形で発達しているかが言語によって異なるのである<sup>8</sup>。

### 2.3. 間接語法を参照して自由間接語法を規定するべきではない

ドイツ語には、自由間接語法とは別に、「伝達節が欠如した間接語法」というものが存在する。ドイツ語では、間接語法の従属節に接続法が現れるが、伝達節がなくても動詞が接続法だと間接語法として解釈されるのである。三

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

瓶 (2004: 99) が挙げている、ケストナーの『飛ぶ教室』からの例を引用する。

(31) Er erzählte ihnen, daß er ihren Rektor, den Oberstudiendirektor Prof. Dr. Grünkern, gut kenne. Und wie es ihm gehe. Und hier oben sei nicht viel zu sehen. Denn der Himmel sei ja unsichtbar. Und fotografieren dürften sie auch nicht.

(Kästner, *Das fliegende Klassenzimmer*)

彼は、校長のグリーンケルン博士をよく知っていると言った。そして、彼は元気かと [言った]。そして、ここには見るべきものはあまりないと [言った]。というのは、天国は目に見えないのだからと [言った]。そして、彼らは写真も撮ってはいけないと [言った]。

ここでは、第1文では、Er erzählte ihnen (彼は彼らに言った) という伝達節の後、従属接続詞 daß に導かれて、動詞が接続法になっている被伝達節が続くという典型的な間接話法になっている。しかし、第2文以降は、伝達節も、従属接続詞もなく、被伝達節が主節となって並んでいる。これらの文が被伝達節であることは、動詞が接続法であることによって示されているのである。

このため、ドイツ語の自由間接話法は、伝達節の無い間接話法と規定することができない。その結果、「自由間接話法」という名称を避けて、「体験話法」(erlebte Rede) という名称が定着している。

さらにドイツ語の間接話法においては、時制の一致も行われぬ。他方、自由間接話法の時制はドイツ語においても語り手の立場から選択される。つまり、自由間接話法の時制を間接話法を参照して説明することはできないのである。

間接話法とは、伝達内容を伝達節の従属節として組み込んだものであるが、そのための従属節化の操作は、2.2 で見てきたとおり、言語によって異なっている。そのため、自由間接話法を規定するのに間接話法を参照するべきで

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

はない。人称や時制については、単に、語り手の立場から選択されると規定するのが適切である。つまり、人称や時制の選択が語りと同じだということである。このため、自由間接話法は語りと連続しているのである。

自由間接話法では、時や場所の副詞句などが、被引用者の立場から選択されることがしばしばある。つまり、直接話法と同じ表現が用いられることがあるのである。例えば、直接話法の(32)の *here* (ここ) と *yesterday* (昨日) が、間接話法の(33)では *there* (そこ) と *the day before* (前日) になっているが、自由間接話法の(34)では直接話法と同じく *here* と *yesterday* になりうる。

(32) He stopped and said to himself, 'Is that the car I saw here yesterday?' (Pascal, 1977: 8)

彼は立ち止まって、「あれはきのうここで見た車か?」と思った。

(33) He stopped and asked himself if that was the car he had seen there the day before. (*ibid.*)

彼は立ち止まって、あれは前日にそこで見た車か自問した。

(34) He stopped. Was that the car he had seen here yesterday? (*ibid.*)

彼は立ち止まった。あれはきのうここで見た車か。

以下の例では、語り手の立場からは *the next day* (翌日) や *that day* (その日) となるところを、登場人物の立場から *tomorrow* (明日) や *today* (今日) としている (なお、(35)の *To-morrow* は古い綴りである)。

(35) To-morrow was Monday, Monday, the beginning of another school week! (Lawrence, *Women in Love*, in Banfield, 1982:98)

明日は月曜日だった。月曜日、また学校での一週間の始まり!

(36) Today she did not want him.

(Lawrence, *The First Lady Chatterley*, in Banfield, 1982:98)

今日は彼女は彼に会いたくなかった。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

以上は時と場所の表現であるが、指示形容詞も *that* (その) ではなく *this* (この) を用いることができる。

(37) *She had seen this film before.* (Wales, 1994:4299)

彼女はこの映画を以前に見たことがあった。

自由間接話法と間接話法は、他にも相違点がある。例えば、次の例文を見られたい (エディプスは、自分の母親であるイオカステとそうとは知らずに結婚してしまったギリシア神話の登場人物である)。

(38) *Oedipus said that his mother was beautiful.* (Banfield, 1982: 27)

エディプスは母のことを美しいと言った。

この間接話法の文には二つの解釈がある。ひとつは、エディプスが文字通り「私の母は美しい」と言ったという解釈である。例えば、エディプスは、自分の母親でない女性を自分の母親だと思い込んで、彼女のことを美しいと言っているのである。つまり、「母」という語は、事実とは関係なく、あくまでもエディプスの言った言い方に基づくものである。このような解釈を *de dicto* 解釈と言う。もうひとつは、エディプスが例えば「イオカステは美しい」と言ったという解釈である。彼はイオカステが自分の母親だとは知らず、引用者が「イオカステ」を「彼の母」と言い換えているのである。この場合、「母」という語は、エディプスの知らない事実に基づいて使われている。このような解釈を *de re* 解釈と言う。しかし、このような言い換えは直接話法では不可能である。よって、次の文には *de dicto* 解釈しかなく、*de re* 解釈は不可能なのである。

(39) *Oedipus said, 'My mother is beautiful.'* (*ibid.*)

エディプスは、「私の母は美しい」と言った。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

ところが、自由間接話法においては、直接話法と同じく、*de dicto* 解釈しかない。例えば、間接話法の(40)は、エディプスがイオカステは自分の母親ではないと信じていたという *de re* 解釈が可能である。これは引用者がイオカステのことを「彼の母親」と言い換えることができるからである。

(40) Oedipus believed that his mother wasn't his mother.

(Reinhart, 1983: 173)

エディプスは自分の母親のことを自分の母親でないと信じていた。

これに対して、自由間接話法の(41)は、エディプスが矛盾した内容の信念を持っているという *de dicto* 解釈しかできないのである<sup>9</sup>。

(41) # His mother was not his mother, Oedipus believed.

(*ibid.*)

自分の母親は自分の母親ではない。エディプスは信じていた。

つまり、間接話法では、元の名詞句を被引用者の知識や信念と関係なく、引用者の立場から言い換えを行えるのに対して、自由間接話法ではそれができないのである。

以上のように、自由間接話法は間接話法とは異なっており、自由間接話法の規定において間接話法を参照するべきではない。

### 3. さまざまな話法と自由間接話法

本節では、まず、3.1 で、さまざまな話法を概観し、思考を伝える話法に思考を言語に見立てるメタファーが関与しているという見方を提案する。そして、3.2 で、話法の全体像を概観し、その中に自由間接話法を位置付ける。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

### 3.1. さまざまな話法

話法には、発話を伝えるものだけでなく、思考を伝えるものも含まれてきた。これは、両者に共通する点が多いからである。しかしながら、リーチ・ショート（2003）は、この両者を区別するべきであるとした。

まずは、発話の伝え方については、リーチ・ショート（2003: 235-255）に従うと、以下のものが区別される。

- (42) ・発話行為の語り手による伝達（NRSA）
  - ・間接話法（IS）
  - ・自由間接話法（FIS）
  - ・直接話法（DS）
  - ・自由直接話法（FDS）

発話行為の語り手による伝達（narrative report of speech acts）（NRSA）は、発話行為が起こったことをだけを伝えるものであり、Page（1988: 35-36）の submerged speech や McHale（1978: 258-259）の diegetic summary に相当する。

- (43) He promised to return.

彼は戻ることを約束した。 (リーチ・ショート, 2003 : 241)

- (44) He promised to visit her again.

彼は再び彼女を訪れることを約束した。 (*ibid.*)

このような場合、発話の具体的な内容や形式については重要でないものとして背景化されている。

自由直接話法は、直接話法の伝達節が欠如したものである。以下はダン・ブラウンの『天使と悪魔』からの引用で、カメルレンゴ（教皇空位期間の教皇代理）が神に祈ると、神が現れたくだりである。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(45) The voice in his head resounded like peals of thunder. “*Did you vow to serve your God?*”

“Yes!” the camerlengo cried out.

“*Would you die for your God?*”

“Yes! Take me now!”

“*Would you die for your church?*”

“Yes! Please deliver me!”

“*But would you die for . . . mankind?*”

(Dan Brown, *Angels & Demons*)

その声は頭の中で雷鳴のように鳴り響いた。「おまえは神に仕えると誓ったか」

「はい」カメルレンゴは大声で言った。

「神のために死ねるか」

「はい、今すぐお連れください。」

「教会のために死ねるか」

「はい、どうか私をお救いください。」

「では……人々のために死ねるか。」

ここでは、最初のやり取りの後、伝達節なしでセリフが続く。これにより、神の問い掛けとカメルレンゴの答えが矢継ぎ早に繰り返されることが表現されている。引用部分を明示するための引用符は言語によってさまざまな形のものがあるが、対話の場合にはダッシュも使用される。また、引用符を用いず、セリフと地の文が外見上区別されない場合もある (Wales, 1994: 4298)。

他方、思考の伝え方についても、発話の場合と平行的に次のような区別ができる (リーチ・ショート, 2003: 255-268)。

(46) He wondered about her love for him.

(思考行為の語り手による伝達 : NRTA)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

彼は彼に対する彼女の愛について思いめぐらした。

(47) He wondered if she still loved him. (間接思考 : IT)

彼女はまだ彼を愛しているのだろうか、と彼は思った。

(48) Did she still love him? (自由間接思考 : FIT)

彼女はまだ彼を愛していただろうか。

(49) He wondered, 'Does she still love me?' (直接思考 : DT)

「彼女はまだぼくを愛しているだろうか」と彼は思った。

(50) Does she still love me? (自由直接思考 : FDT)

彼女はまだぼくを愛しているだろうか。

このように並べると、思考の伝え方は、発話の伝え方と同じであるように見える。しかし、リーチ・ショート (2003) 以来、両者を区別する考え方が広く受け入れられている。この考え方の根拠は以下の通りである。

発話のはじめから言葉で表されるものであり、それをそのまま伝えるのが直接話法である。それゆえ、直接話法が基本的であると考えることができる。他方、間接話法は元の発話の内容を語り手が言い換えている。

他方、思考は言葉として発話されるわけではない。過去の自分の思考ならともかく、他人の思考は知りえない。「全知の語り手」あるいは少なくとも「語り手」だからこそ知りえるのである。そして、他人の思考を知りえたとしても、そもそも、思考のはじめから言葉でなされているわけではない。そこで、リーチ・ショート (2003: 265) は、直接思考を、「もし登場人物が自分の考えを明示するとすれば、このように言ったであろう」という形だとした。そして、思考の内容だけを伝える間接思考の方が基本的であるとした。

もっとも、間接思考で表された思考内容もそもそも言葉でなされたものではなかったとしたら、言語以前の思考を語り手が文として説明しているということになる。すると、間接思考は思考行為の語り手による伝達と区別できない (Fludernik, 1993: 311; 2005: 561)。

このような思考と発話の違いに基づいて、思考の伝え方のみの分類が提案されている。例えば、Cohn (1978) は、思考の伝え方を3分類した。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

- (51) ・ psycho-narration (NRTA に対応)  
・ quoted monologue (DT および FDT に対応)  
・ narrated monologue (FIT に対応)

また、Palmer (2004: 55; 2005: 603) も同様の 3 分類をしている。

- (52) ・ thought report (NRTA と IT に対応)  
・ free indirect thought (FIT に対応)  
・ direct thought (DT および FDT に対応)

さて、直接思考を我々が読む際に、それを「もし登場人物が自分の考えを明示するとすれば、このように言ったであろう」という仮定的なものとして理解しているだろうか。むしろ、これらの表現によって、思考が直接表されているように読んでいることが多いのではないだろうか。

これには、思考を言語に見立てるメタファーが関与していると考えられる。これは、Lakoff and Johnson (1999: 244-245) や Johnson (2007: 202-203; 2008: 49-50) が「言語としての思考メタファー」(Thought As Language metaphor) と呼ぶものである。このメタファーにより、思考することは発話することに見立てられる。例えば、英語で *say to oneself* (自分に言う) は、思うことを意味するが、これは思考を自分への発話に見立てることに基づいている。同様のことは、フランス語 *se dire* やドイツ語 *sich sagen* についても言える。さらに、このメタファーにおいては、思考は言語によって表現可能である。以上より、発話を伝えるさまざまな話法が思考を伝えるのに転用される<sup>10</sup>。伝統的には、発話の伝え方の分類が思考の伝え方の分類に問題なく適用できるという前提 (Palmer (2004: 13) のいう *speech category approach*) があったわけだが、これ自体が「言語としての思考メタファー」に基づくものと言えるであろう。

ここで、発話と思考が截然と区別できるかという疑問を提起しておく。こ

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

の区別は、直接話法が発話された言葉をそのまま伝えるものであるのに対して、直接思考は言語化以前の思考を言語化しているという前提に依拠している。このような前提は確かに小説においては一見成り立っているように見える。ここでは、通常、直接話法は元の発話を再現しているというよりも、元の発話そのものを提示しているに等しい。しかし、ノンフィクションや日常会話においては、直接話法は元の発話を忠実に再現しているどころか、それを言い換えたり、新たに作り出したりしている (Tannen, 1989: 98-133; Clark and Gerrig, 1990: 795-800, Fludernik, 1993: 409-414; 鎌田, 2000: 51-84; 藤田, 2000:146-178) <sup>11</sup>。このような直接話法は、言語化以前の思考を言語化する直接思考と、根本的には異ならないのではないだろうか。

なお、以下では、「～話法」と「～思考」は区別せずに、合わせて単に「～話法」と呼ぶ。また、区別が必要な場合には、「発話の～話法」ないし「思考の～話法」とする。

### 3.2. 自由間接話法

自由直接話法は直接話法と異なり伝達節を欠いているが、それ以外には直接話法と基本的には異ならない。いずれの話法も、被伝達節は主節の形態をとり、従属節に見られるような制約がない。また、人称や時制などの直示的な表現は発話者や思考者の立場から選択されているので、語りとは区別される。例えば、次を見られたい。

(53) High atop the steps of the Great Pyramid of Giza a young woman laughed and called down him. “Robert, hurry up! I knew I should have married a younger man!” Her smile was magic.

He struggled to keep up, but his legs felt like stone. “Wait,” he begged. “Please . . .”

As he climbed, his vision began to blur. There was a thundering in his ear. *I must reach her!* (Brown, *Angels & Demons*)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

ギザの大ピラミッドの石段の頂上で、若い女が笑って、下にいる彼を呼んだ。「ロバート、急いで！ やっぱりもっと若い男と結婚するべきだったわ」彼女の微笑みは魔法だった。

彼はついていこうと頑張ったが、両脚が石のように感じられた。「待ってくれ」彼は懇願した「お願いだ……」

登るにつれて、視界がかすみはじめた。耳の中で雷が鳴った。彼女のところまで行かないと！

ここでは、下線部が思考の自由直接話法になっている。そのことを示すためにイタリック体が使われているのだが、三人称過去形の語りの中にいきなり一人称現在形が出てくることから思考の自由直接話法であることが分かる。この小説では、頻繁に思考の自由直接話法が出てくるが、多くの場合、語りとの区別は明瞭である。イタリック体になっているので分かりやすいが、直示の中心が登場人物にあることも大きく寄与している。

それに比べると、自由間接話法は間接話法とは大きく異なる。すでに見たように、間接話法の被伝達節には、さまざまな制約が見られる。それに対して、自由間接話法には、そのような制約が見られない。また、間接話法の被伝達節は、従属節としての形式を持っているため、語りとははっきり区別されている。しかし、自由間接話法では、伝達内容が主節であり、しかも、人称や時制が語り手の立場から選択されているために、語りと連続している。

もっとも、既に述べたとおり、自由間接話法では、登場人物の立場から「今」や「ここ」のような時や場所の表現が選択される場合もある。このような場合には、自由間接話法と語りで相違が生ずるので、そこで両者の相違が明確になると思われるかもしれない。しかし、実際には、語りの中にも物語世界に直示の中心を置いた表現が出てくる（Fludernik, 1993: 334-335, 阿部, 2014, 2015）。また、語りの中に登場人物の言語が入ってくることも指摘されている（McHale, 1978: 260-261; シュタンツェル, 1989: 194-196; Fludernik, 1993: 332-338）。そうすると、自由間接話法と語りの境界は不分明となり、やはり連続しているということになる。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

以上をまとめると、次のような表になる。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

| 人称・時制の選択 | 登場人物の立場 | 語り手の立場 |      |
|----------|---------|--------|------|
| 発話・思考の内容 | 主節      |        | 従属節  |
| 伝達節など有り  | 直接話法    |        | 間接話法 |
| 伝達節など無し  | 自由直接話法  | 自由間接話法 |      |
|          |         | 語り     |      |

まず、自由間接話法と間接話法の関係が、自由直接話法と直接話法の関係と平行的ではないことを確認されたい。また、自由間接話法が語りと連続していることも重要である。端的に言えば、自由間接話法は、自由直接話法の人称と時制を語り手の立場から選択したものにかえた話法であり、登場人物の発話や思考を語りの中に断絶なく取り込むものである。

なお、ロシア語で自由間接話法に相当する擬似直接話法（несобственно-прямая речь）においては、人称は語り手の立場から選択されるが、時制は登場人物の立場から選択される。他方、ロシア語では間接話法の時制も登場人物の立場で選択される。そうすると、時制については、擬似直接話法は間接話法に準じているという考え方も一見成り立ちそうではある。しかし、すでに述べたとおり、ロシア語は大過去や過去未来を表す時制形式が存在しないので、発話や思考を引用する場合には時制については直示の中心を発話や思考の時点に移動せざるをえないのである。よって、擬似直接話法の時制が間接話法に準じているというよりも、そもそも直接話法に準じていると考えるのが適切であろう。自由間接話法においては、時や場所の直示表現が直接話法に準ずることがあるが、ロシア語の擬似直接話法の時制においては、時制組織の特性から、直接話法にシステマティックに準ずるようになっているのである<sup>12</sup>。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

#### 4. 話法の連続性

前節では、それぞれの話法を明確に区別できるものとして扱ってきた。しかし、本節では、それぞれの話法の実際の現れ方はむしろ連続的であることを見る。4.1 では、伝達節の有無が截然としたものではないことを見る。4.2 では、ドイツ語の伝達節を欠く間接話法が、英語やフランス語の自由間接話法に対応する場合があることを見る。4.3 では、自由間接話法や（自由）直接話法において見られる現象が間接話法にも見られる場合があることを見る。

##### 4.1. 伝達節

ここまで、伝達節については、特に問題になるものとしては取り上げてこなかった。しかし、伝達節があるかないかという二分法は、必ずしも単純に成り立っているわけではない。

例えば、直接話法においては、これまで、まず伝達節があって、その後に被伝達節が続くという形式だけを考えてきたが、現実には、伝達節は被伝達節の途中にも、後にも現れる。

(54) She asked, 'Do you love me, Charles?' (Wales, 1994: 4298)

彼女は、「私のことを愛している、チャールズ？」と尋ねた。

(55) 'Do you love me, Charles?' she asked. (*ibid.*)

(56) 'Do you,' she asked, 'love me, Charles?' (*ibid.*)

(57) 'Do you love me,' she asked, 'Charles?' (*ibid.*)

伝達節がなければ、自由直接話法になる。

(58) 'Do you love me, Charles?' (*ibid.*)

伝達節の有無を基準とすれば、一見、直接話法と自由直接話法の区別は明瞭

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

だと思われるかもしれない。しかし、伝達節が被伝達節の途中や後に現れる場合は、伝達節が従属的になるとともに、被伝達節の独立性が高まり、自由直接話法に近くなる。この場合、伝達節で倒置することがあることも、伝達節が従属的であることを示していると思われる<sup>13</sup>。

また、次ように伝達節が非伝達節から離れて出てくるような場合を考えると、伝達節の有無は必ずしも単純には割り切れない。

(59) 'Do you love me, Charles?' She was five hundred miles away in Los Angeles when she asked him. (ibid.)

「私のことを愛している、チャールズ？」彼に尋ねた時、彼女は五百マイル離れたロサンジェルスにいた。

伝達節が後置されている場合では、次のような例も問題になる。

(60) Would the doctor like a drink, she asked. (Wales, 1994: 4297)

先生はお飲み物はいかがですか、彼女は尋ねた。

(61) Could he accompany her home, he asked. (Toolan, 2006: 703)

家まで送っていてもいいか、彼は尋ねた。

ここでは、人称や時制が語り手の立場から選択されている一方、伝達節が存在しているので、間接話法であると思われるかもしれない。実際、Wales (1994: 4297, 4299) は、このような場合を間接話法として扱っている。しかし、Toolan (2006: 703, 704-705) は、このような場合は、被伝達節が登場人物の言葉を表現したものとして理解されてから伝達節が出てくるので、自由間接話法として扱う根拠があるとしている。それに加えて、通常の間接話法の被伝達節が従属節であるのに対して、伝達節が後置される場合には被伝達節が主節になっていることを見れば、自由間接話法に近いと言える。しかしながら、通常の間接話法が伝達節を欠いて語りと連続しているのに比べると、問題のケースでは伝達節でその曖昧性が解消されている点も無視

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

できない。間接話法と自由間接話法を断絶したものと考えてるのではなく、伝達節が挿入節として現れる場合を中間例として連続していると考えてるのが妥当であろう。

#### 4.2. ドイツ語の伝達節を欠く間接話法と自由間接話法

間接話法の現れ方は多様であり、そのため、実際の使用においては、自由間接話法に近づく場合もある。

間接話法には構造的な制約がある。それは、複数の文からなるテキストを引用することが難しいことである。複数の文を等位接続した重文を従属節にするには、それぞれの文毎に従属接続詞を反復し、それを等位接続して次のような構造にしなければならない。

(62) He said that S<sub>1</sub>, that S<sub>2</sub>, and that S<sub>3</sub>.

その他の話法、すなわち、直接話法、自由直接話法、自由間接話法においては、伝達内容が主節の形式を取ることで、容易に文を連ねていくことができる。しかし、間接話法は伝達内容を従属節として取り込むために、構造上の制約が生じるのである。

ところが、既に見たようにドイツ語においては、伝達節がなくても接続法を用いることにより被伝達節であることを標示できるので、主節を連ねながら引用であることを示せるのである。前に引用した三瓶（2004: 99）が挙げている例を再掲する。

(63) 1Er erzählte ihnen, daß er ihren Rektor, den Oberstudiendirektor Prof. Dr. Grünkern, gut kenne. 2Und wie es ihm gehe. 3Und hier oben sei nicht viel zu sehen. 4Denn der Himmel sei ja unsichtbar. 5Und fotografieren dürften sie auch nicht.

(Kästner, *Das fliegende Klassenzimmer*)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

1彼は、校長のグリーンケルン博士をよく知っていると言った。  
2そして、彼は元気かと [言った]。3そして、ここには見るべきものは  
あまりないと [言った]。4 というのは、天国は目に見えないのだから  
と [言った]。5 そして、彼らは写真も撮ってはいけないと [言った]。

既に説明したとおり、下線部 1 は、伝達節と従属接続詞と被伝達節からなる典型的な間接話法であるが、下線部 2～5 は、伝達節の無い被伝達節が主節として並んでいる。これらが被伝達節であることは、接続法によって示されている。

法により被伝達節であることを示すことができない言語ではこのような場合どのようにするのであろうか。英訳でこの一節がどのように訳されているか見てみる。

(64) 1He told them that their headmaster, Dr. Grünkern, was an old friend of his, 2and asked how he was. 3There wasn't much for them to see up here, he said, 4because heaven was invisible. 5And they couldn't take photographs either.

(Kästner, *The Flying Classroom*)

下線部 1 は、典型的な間接話法なので、そのまま訳されている。下線部 2 は、もともと間接疑問文なので、伝達動詞 asked を追加して、通常の間接話法に直している。下線部 3 は伝達節を挿入節として付加し、下線部 4 は下線部 3 の従属節としてそのまま続けられている。そして、下線部 5 に至って、伝達節がなくなり、自由間接話法になっている。このように、間接話法の伝達内容を継続するのは、自由間接話法が出てくる場合のひとつである (Bally, 1912: 553; Wales, 1994: 4298)。つまり、ドイツ語の伝達節を欠く間接話法は、英語やフランス語の自由間接話法に対応する場合があるのである (Fludernik, 1993: 149) <sup>14</sup>。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

#### 4.3. 間接話法の変異形

2.1 で見たとおり、Banfield は、直接話法や自由間接話法では見られるのに、間接話法においては見られないさまざまな現象があるとした。しかし、それらの現象が完全に間接話法から排除されているわけではない。

例えば、McHale (1978: 254-255) は、Banfield (1982: 28-34) が間接話法から排除されるとした疑問文の倒置・感嘆詞・感嘆文・反復・ためらい・不完全な文・方言・外国語が間接話法に現れている例を、アメリカの作家ドス・パソスの作品から挙げている。

間接話法に疑問文の倒置が現れる例としては、McHale は、以下のものを引用している。

(65) [...] they heard people asking each other who could that charming scintillating brilliant young couple be, somebody interesting surely [...]  
(Dos Passos, *42nd Parallel*, in McHale, 1978: 254)

あの魅力的できらめき輝く若い二人連れは一体誰だろう、きっと興味深い人たちだろうと、人々がお互いに尋ね合っているのを彼らは聞いた。

(66) Mr. Smith asked Eleanor wouldn't she eat lunch with them as she was mentioned in the will [...]

(Dos Passos, *42nd Parallel*, in McHale, 1978: 254)

スミス氏はエリノアに、ご一緒に昼食を食べませんか、あなたのことは遺言に書いてありますからと、尋ねた。

Toolan (2006: 703) は、このような語法は非標準的ないし方言と判断されるとしているが<sup>15</sup>、特定の変種に限られたものではない。Jespersen (1924: 298) はディケンズの例を引用しているし、Fludernik (2005: 152-153) も実例を幾つか挙げている。また、変形文法の入門書である Radford (1988: 299) も、このような構文に言及している<sup>16</sup>。

McHale (1978: 255) は、ためらいについて、以下のような例を挙げてい

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

る。

(67) Mr. Barrow said without enthusiasm, er, he'd go.

(Dos Passos, 1919, in McHale, 1978: 255)

バロウ氏は、気がなさそうに、えーと、行きますと言った。

これも、ドス・パソスに限らない。例えば、イギリスの作家ミルンにも見られる。

(68) The Squire said that he- er- hadn't- er- intended- er- to say anything . . .

(Milne, *A Village Celebration*, in Wales, 1994: 4297)

だんな様は、私は、えーと、何かを、えーと、言うつもりでは、えーと、なかったのですと言った。

間接話法における反復や方言についても、ドス・パソスに限られたことではない。例えば、Clark and Gerrig (1990: 791) は、間接話法においてどもりが再現されている例をコンラッドから、コクニー（ロンドンなまり）の発音・語彙・文法が再現されている例をディケンズから引用している。Fludernik (1993: 227-279) も、Banfield が間接話法では現れないとした現象の実例を多く挙げている。

McHale は、このような間接話法が観察されることを踏まえて、*indirect content paraphrase* と *indirect discourse mimetic to some degree* を区別している。*indirect content paraphrase* は、本来の発話の文体や形式を考慮することなく、その内容を引用者の立場から言い換えているものであり、典型的な間接話法に対応する。それに対して、*indirect discourse mimetic to some degree* は、単に発話の内容を報告するにとどまらず、その文体や形式も再現するものである。さらに、Page (1988: 36-37) は、発音も含めた発話の多くの特徴を保持する 'coloured' *indirect speech* と語彙的な特異性に忠実な

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

‘parallel’ indirect speech を区別している。このような間接話法は、直接話法に近づいていると言える。

発話の形式を再現するような間接話法の例を、フランスの作家トゥーサンから見てみる。次の例では、下線部の間接話法の最後に、確認するための疑問を付け加えている。これは、英訳でも再現されている。

(69) 【フランス語原文】

Puis, s’irritant un peu à mesure que, fataliste, Monsieur se bornait à répéter qu’à son avis c’était devenu insoluble, elle conclut, agacée, qu’il pouvait quand même se débrouiller tout seul, non ?

(Toussaint, *Monsieur*)

【英訳】

Then, becoming somewhat irritated with Monsieur, who fatalistically stuck to repeating that in his opinion it had become insoluble, she concluded, at her wits’ end, that he could get along quite well on his own, no?

(Toussaint, *Monsieur: A Novel*)

それから、ムッシューが、諦めきって、自分が思うにはそれはもうどうしようもないんだと繰り返すばかりなので、彼女は少し腹が立ってきて、それにしても自分一人でなんとかできるでしょ、違う？ といらだちながら話を切った。

また、次の例では、間接話法の被伝達節の中に相手に確認を求める下線部の挿入句が割り込んでいる。これも英訳で再現されている。

(70) 【フランス語原文】

Comme, de nouveau, il semblait attendre une réponse, Monsieur finit par lui demander si, dans la perspective d’une publication à Stuttgart, c’était bien Stuttgart n’est-ce pas, il ne serait pas plus

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

judicieux de songer à écrire le livre en allemand.

(Toussaint, *Monsieur*)

【英訳】

As, again, he seemed to be waiting for an answer, Monsieur finally asked him if, as he planned to have the book published in Stuttgart, it was Stuttgart was it not it would not be more judicious to think of writing it in German. (Toussaint, *Monsieur: A Novel*)

彼がまた返事を待っているようなので、ムッシューは結局質問した。シュツットガルトで出版するつもりなら、シュツットガルトでしたよね、本はドイツ語で書くことを考えた方が賢明ではないですか。

その他にも、間接話法において、呼びかけが出てくる例や、途中で前言を訂正していく例もある<sup>17</sup>。これらの例も、間接話法に直接話法が混入していると考えられる。

2.3 で述べたとおり、場所の副詞句は、間接話法では語り手の立場から選択されるが ((33)参照)、自由間接話法では登場人物の立場から選択されることがしばしばある ((34)参照)。しかし、間接話法においても、場所の副詞句が登場人物の立場から選択されている例がある。

(71) 【ラングドンを目をさましたが、どこにいるのか分からなかった。】

Langdon tried to remember how he had gotten here . . . and where *here* was. (Dan Brown, *Angels & Demons*)

ラングドンはここにどうやって来たのか……そして「ここ」はどこなのかを思い出そうとした。

下線部の *here* はラングドンの立場から選択されている<sup>18</sup>。

以上のように、間接話法と言っても、実際には直接話法や自由間接話法に近づくことがあり、その境界は曖昧であると考えられる。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

## 5. 自由間接話法の幾つかの問題

本節では、自由間接話法の幾つかの問題について見る。5.1 では、自由間接話法において元々の発話がまとめられている場合について見る。5.2 では二声仮説と語り手不在説について見る。5.3 では、知覚の自由間接話法を取り上げ、映画やマンガと共通するメカニズムが働いていることを見る。5.4 では、フランス語で特に問題にされることが多い、自由間接話法の時制について見る。

### 5.1. まとめられた自由間接話法

阿部（2015: 343-345）は、自由間接話法においては「複数の声の統合」が起きることがあると指摘している。

(72) Et ils (= Frédéric et Deslauriers) résumèrent leur vie. / *Ils l'avaient manquée tous les deux, celui qui avait rêvé l'amour, celui qui avait rêvé le pouvoir. Quelle en était la raison ?*

(Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, in 阿部, 2015:343)

ふたりは自分らの半生をふりかえってみた。／恋を夢見た者も、権力を夢見た者も、どちらも人生の失敗者となってしまった。どうい  
うわけだ  
ろう？ (フローベール『感情教育』in 阿部, 2015:343)

イタリックの部分は、先行文脈により、実際に発話された言葉を表現する自由間接話法であると考えられる。しかし、阿部はこの部分を *ils disent que ...* (= *they said that ...*) 型の間接話法に変換できないとする。なぜなら、そのようにすると、「二人があたかも合唱のように声をそろえて当該の台詞を述べた」という奇妙なことになるからだとしている。そこで、阿部は、その場にひそかに同席している無名の擬似主体が二人の会話を聞いて、そのポイントを簡潔にまとめたという議論を展開する。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

しかし、直接話法においても、もともとの長い発話を短くまとめることがある。例えば、Ducrot (1984: 199) は、直接話法においては 2 分間の発話を 2 秒で報告することもできると述べている。

(73) En un mot, Pierre m'a dit « J'en ai assez ». (Ducrot, 1984: 199)  
一言で言うと、ピエールは私に「俺はもううんざりだ」と言ったんだ。

Tannen (1989: 113) は要約された直接話法の実例を挙げている。

(74) 【フィリピン料理レストランで晩御飯を食べようとしていると、一緒に来ていた人たちの中の一人が店員に聞こえるように大声でレストランの悪口を言った。】

and this man is essentially saying

“We shouldn't be here

because Imelda Marcos owns this restaurant.” (Tannen, 1989: 113)

この男の人は要するにこう言っているんです。

「こんなところにはいられない。

だって、このレストランはイメルダ・マルコスのものなんだから。」

また、複数の人間の発話を一つの発話にまとめてしまうこともある。次も Tannen (1989: 113) の挙げている例である。

(75) 【アテネの空港でギリシア人女性が列に割り込もうとした。列に並んで何時間も待っていたアメリカ人たちは、彼女の行動を非難し、彼女の言い訳も聞かなかった。しかし、最後にギリシア人女性は小さな子供たちを連れていたと言った】

And then all the Americans said

“Oh in that case, go ahead.” (Tannen, 1989: 113)

それでアメリカ人たちはみんな言ったんですよ。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

「だったら、お先にどうぞ」って。

Fludernik (1993: 411-412) も同様の例を挙げている。

このように、直接話法においても、長い発話が要約されたり、複数の人間の発話がひとつにまとめられたりすることがある。同じことが自由間接話法において起きてもおかしくない（実際、Fludernik (1993: 407-408) は自由間接話法において複数の人間の発話がひとつにまとめられている例を挙げている）。(72)において二人の登場人物の発話が簡潔にまとめられているのも、そのような現象の一例であると考えられる。

直接話法であれ、自由間接話法であれ、発話を要約したり、複数の人間の発話を統合したりするのは、引用者である。小説の場合ならば、語り手がそれに相当するであろう。ただし、「語り手」とは物語を語る主体であるが、実在の「作者」とは一致しない。阿部は(72)において二人の登場人物の発話を簡潔にまとめた者として擬似主体を仮定するが、そのような仮定は不要か、あるいはその「擬似主体」とは事実上語り手と同じものであろう。

## 5.2. 二声仮説と語り手不在説

自由間接話法においては、登場人物の声と語り手の声が同時に聞こえると言われてきた。これを「二声仮説」(dual voice hypothesis) という。自由間接話法においては、登場人物の思考を表現しながらも、人称や時制が語り手の立場から選択されていて語り手と連続しているため、語り手の声とも聞こえるのである。

自由間接話法において登場人物と語り手の声が混合しているという二声仮説は、文学作品をコミュニケーションの一種と見なす、あるいは、少なくともコミュニケーションを模倣しているという考え方を前提としていた。この考え方においては、語り手が聞き手に語っているというモデルで文学作品を捉えることになる。しかし、Banfield (1982) は、自由間接話法には語り手はいないとして、「二声仮説」を否定している。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

バンヴェニストは、「話」(discours)と「歴史」(histoire)を区別した。「話」においては、話し手が聞き手に話していて、話し手が一人称代名詞「わたし」、聞き手が二人称代名詞「あなた」、話している場が「ここ」、話している時が「いま」という直示表現で指示される。それに対して、「歴史」においては、そのような話し手が聞き手に話しているというコミュニケーションの構造が排除されている。よって、そこには、「わたし」・「あなた」・「ここ」・「いま」はない。これが典型的に現れているのは歴史叙述であるが、単純過去(フランス語の書き言葉で用いられる完了相の過去時制)で書かれた三人称小説の語りも「歴史」である。このような語りにおいては、語り手は存在していないということになる。バンヴェニストは、「ここにはだれ一人話すものはないのであって、出来事自身がみずから物語るかのようである」(1983: 223)とたとえている。Banfieldはこの考え方にもとづいて、自由間接話法には語り手の声は存在しないとしているのである。

Banfieldは、生成文法の枠組みで、自由間接話法を文単位で分析し、語り手がいることを示す指標が現れないことを示そうとした。しかし、語り手がいることを示す指標が現れないとしても、語り手はいないと言い切れるのであろうか。実は、Banfield(1982: 141-180)は、一人称の物語については、語り手が聞き手に語りかけているというコミュニケーションの枠組みに則ったskaz(スカース)という物語以外に、語り手は語っているが、誰にも語りかけていない物語も認めている。このような物語においては、語り手が聞き手に語りかけていることを示す指標は現れない。しかし、一人称が現れるので語り手は存在しているのである。そうすると、三人称の物語においては、語り手がいることを示す指標が現れない場合、語り手が聞き手に語りかけているわけではないとは言えても、語り手が存在しないとまでは言い切れないのではないだろうか。そもそも、語り手は実在の作者とは異なり、物語を語る主体としてテキストからその存在が措定される仮構である。そのため、テキストの中にその存在を示す指標が現れなければ、その有無が問題になりうるのである。しかし、形式的な指標が存在しなくても、読者はその存在を措定しても構わないのではないだろうか。確かに、「歴史」の典型例である歴史

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

叙述を読む人は、語り手の存在を措定することは少ないかもしれない。しかし、物語の場合には、事情がかなり異なるように思われる。誰かに語りかけているわけではないとしても、誰かが語っているものとして読んでしまうのが、一般的な読者の実態ではなかろうか。

ここで、バンヴェニストの「歴史」から、「語りかけてこない語り手」のいる場合を分離し、「話」と「歴史」に並ぶ第三のカテゴリーとして、「物語」(récit)を設定してみよう。「物語」では、語り手はコミュニケーションをしない。よって、「あなた」と言うこともないし、語りかけてくることもない。また、コミュニケーション行為に基づく「いま」も「ここ」もない。そして、自らを「わたし」と呼ぶことも知らない。しかし、だからと言って語り手はいないわけではない。この「語りかけてこない語り手」は、コミュニケーションはしないが、それ以外の働きは持ちうる。このように考えれば、コミュニケーション構造を持たない小説に現れる自由間接話法において、登場人物の声と同時に語り手の声を聞いてしまうこともありえることとなるだろう。

### 5.3. 知覚の自由間接話法

自由間接話法に、登場人物の発話や思考を伝えるものだけでなく、知覚を伝えるものも含めることがある。これは、自由間接話法に倣って、さまざまな名称で呼ばれている。英語では、free indirect perception (自由間接知覚)、represented perception (描出知覚)、narrated perception (語られた知覚)、substitutionary perception (代理知覚)、フランス語では、style indirect libre de perception (知覚の自由間接話法)、ドイツ語では、erlebter Eindruck (体験印象)、erlebte Wahrnehmung (体験知覚) といった名称がある。

例えば、次の例の下線部は、知覚の自由間接話法に該当すると考えられる。

(76) 【瀕死のコーラーがマッチ箱ほどの大きさの装置をラングドンに差し出しながら息絶え、装置がその膝の上に落ちた。】

Shocked, Langdon stared at the device. It was electronic. The words

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

SONY RUVI were printed across the front.

(Dan Brown, *Angels & Demons*)

ショックを受けながら、ラングドンは装置を見つめた。電子機器だった。前面に「SONY RUVI」と印字されていた。

ここでは、ラングドンは装置を見つめたという文の後の下線部は、ラングドンが見たものを描写していると解釈できる。このように下線部が登場人物が見たものとして解釈されるのには、その前で、登場人物が何かを見ることを表す表現があることが契機となっている。実際、視覚の自由間接話法とされるものは、このような表現に続くことが多い。

これは、映画における「視線つなぎ」という編集方法と似た手法である。「視線つなぎ」においては、まず、何かを見ている人物が映し出され、次のカットでその人物が見ているものが写し出される。登場人物の視点から撮影されたショットは、「POV ショット」(POV は point of view の略)、「視点ショット」、「主観ショット」、「主観カメラ」、「主観映像」などと呼ばれる。この POV ショットは、登場人物が知覚しているものをそのまま描写しているという意味で、知覚の自由間接話法と類似していると言える。興味深いのは、この POV ショットへの導入に、しばしば、何かを見ている人物の映像が使われるということである (Arijon, 1976: 591; Katz, 1991: 267-275; 今泉, 2004: 277-278)。視線つなぎが映像の解釈にもたらす効果は、井上 (2006, 2007) によって実験的にも検証されている。また、この技法はマンガにも持ち込まれている。マンガにおいては、前のコマで何かを見ている人物を描き、次のコマでその人物が見ているものを描く。竹内 (1989, 1992: 233-239) は、手塚治虫が物語の展開の重要な契機となるところでこの技法を用いたとしている<sup>19</sup>。

映画やマンガのこれらの技法において、登場人物の見ているものの描写の前に、その登場人物が何かを見ているところが出てくることは、知覚の自由間接話法が登場人物が何かを見ることを表す表現の後に続くことが多いことに対応していると言える (三瓶, 2012: 22-25)<sup>20</sup>。このことは、これらが共

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

通の基盤を持つものであることを示唆している<sup>21</sup>。

知覚の自由間接話法は、おもに視覚に関するものであるが、他の感覚でも可能である。例えば、次は聴覚の例である。

(77) 【教皇専用の図書室の中から物音が聞こえる。シャルトランはその扉を開けようとしたが、鍵がかかっている開かない。】

He put his ear to the door. The banging was louder.

(Dan Brown, *Angels & Demons*)

彼は扉に耳を当てた。 ドンドンと叩く音が大きくなった。

扉に耳を当てると音が大きくなったわけだから、下線部は彼に聞こえたものを描写していると言える。これも、映画で同じことができると思われる。登場人物が扉に耳を当てるとドンドン叩く音が大きくなったら、観客はそれを登場人物に聞こえたものとして理解するであろう。

しかし、知覚の自由間接話法は、発話や思考の自由間接話法とは異なったところもある。そもそも、知覚は直接話法では表されない（擬音語や擬態語を用いる場合を除く）。直接話法はもともと発話を提示する方法である。思考も、言語に見立てることによって、直接話法の形式で提示することが可能になる。しかし、知覚は言語に見立てられることはないか、あったとしてもまれであろう。また、思考には疑問に思うということがあり、これは疑問文という言語形式で捉えることができる。だが、知覚に疑問に対応するものは存在しない（知覚したことに疑問を感じたとしたら、それは思考である）。知覚の自由間接話法は平叙文であり、それは多くの場合、物語世界の事実に対応している。よって、語りと極めて近いものである。これを発話や思考の自由間接話法とともに扱って良いかという疑問も生ずる。だが、思考の自由間接話法を発話の自由間接話法とともに扱っている時点で、自由間接話法は拡張されているとも言える。さらに知覚の自由間接話法を加えて考察していくことは発話や思考の自由間接話法を理解していく上でも有益であろう。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

#### 5.4. 自由間接話法とフランス語の単純過去

フランス語は、時制の多い言語であり、過去時制として、複合過去・半過去・単純過去などの時制がある。複合過去は、英語の現在完了と同じく、所有動詞（あるいは繫辞）に由来する助動詞と過去分詞から作られ、本来は現在完了を表したが、過去も表すようになっている。半過去は、未完了相の過去を表す。単純過去は、書き言葉で用いられる完了相の過去時制で、しばしば現在とは切り離された過去を表すと説明されている。

さて、フランス語においては、自由間接話法に単純過去は決して現れないと広く認められてきた。しかし、Ducrot (1980: 58) は、自由間接話法はどのような時制でも可能だとしており、単純過去の例も挙げている。もっとも、Vuillaume (1998) は、Ducrot への反論を展開し、元の発話に単純過去が含まれでもしない限りは、自由間接話法には単純過去は現れえないとしている。

それに対して、自由間接話法においては、半過去が代表的な時制である。そのため、時制が単純過去から半過去に移行すると、語りから自由間接話法への移行の印となりうる (Vuillaume, 2000: 117)。これは、知覚の自由間接話法でも同じである (Banfield, 1981: 66; 田原: 2013)。例えば、次のような一節があった場合、下線部 1 は *regarda* (見た) が単純過去で語りになっているが、下線部 2 は *étaient couverts* (覆われていた) と *Il y avait* (あった) が半過去で、ジャンが見たものとして解釈できる。

(78) 1Jean regarda dans la chambre par la fenêtre. 2Les murs étaient couverts de tableaux. Il y avait un lustre au plafond.

1 ジャンは窓から部屋の中を見た。 2 壁は絵に覆われていた。天井にはシャンデリアがあった。

しかし、単純過去が登場人物の知覚したものを表していると考えられる場合もある。以下は、フローベールの『エロディア』の一節で、ヘロデ・アンティパスがマケルス城のテラスの欄干に肘をついて景色を眺める場

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

面である。

(79) <sup>1</sup>Un matin, avant le jour, le Tétrarque Hérode-Antipas vint s'y accouder, et regarda.

<sup>2</sup>Les montagnes, immédiatement sous lui, commençaient à découvrir leurs crêtes, pendant que leur masse, jusqu'au fond des abîmes, était encore dans l'ombre. Un brouillard flottait, <sup>3</sup>il se déchira, et les contours de la mer Morte <sup>7</sup>apparurent. <sup>4</sup>L'aube, qui se levait derrière Machærous, épanyait une rougeur.

(Flaubert, *Hérodias*)

<sup>1</sup>ある朝、日の出前に、四分領主ヘロデ・アンティパスはそこに行き、肘をついて眺めた。

<sup>2</sup>すぐ下では、山々が頂を見せはじめていたが、その山体は、谷の底の方まで、まだ闇の中にあった。霧が漂っていたが、<sup>3</sup>それが裂けて、死海の縁が現れた。<sup>4</sup>マケルス城の背後から登る朝日が、赤みがかかった色を広げていた。

下線部 1 は、動詞の *vint* (行った) と *regarda* (眺めた) が単純過去であり、語りになっている。それに対して、下線部 2 は *commençaient* (はじめていた)、*était* (あった)、*flottait* (漂っていた) が半過去で、アンティパスが見た景色として解釈できる。ところが、下線部 3 では、*déchira* (裂けた) と *apparurent* (現れた) が単純過去で、Banfield (1981, 1982) に従えば、語りに戻っていることになる。しかし、続く下線部 4 では、*se levait* (登っていた) と *épanyait* (広げていた) が半過去になっていることも踏まえると、下線部 2 から下線部 4 まで一貫してアンティパスが見た景色と解釈する方はるかに自然である。実際、Nølke et Olsen (2003: 78-79) は、下線部 3 を自由間接話法とは考えていないものの、アンティパスが見た景色であるとしている。Nølke et Olsen によれば、このような単純過去の主観的な用法はアンティパスという目撃者が出てきているために可能になっている。東郷

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(2010: 22-23) は、単純過去自体には視点を表す力はないが、下線部 3 がアンティパスの見た景色であることを認め、それを知覚動詞による談話的效果によるものとしている。Lescano (2012: 10-11) は、単純過去の *apparurent* (現れた) は、見えるようになったことだけを表しており、アンティパスが見たということと組み合わせると、アンティパスが下線部 3 の内容を見たと感じるとしている。このように、下線部 3 はアンティパスが見た内容として解釈されることは認めつつも、単純過去なので自由間接話法ではないという議論が多い。

しかし、この一節のドイツ語訳においては、単純過去も半過去も、過去形として訳される。

(80) 1Eines Morgens, vor Anbruch des Tages, kam der Tetrarch Herodes-Antipas hierher, stützte sich auf und schaute.

2Die Berge dicht unter ihm fingen an, ihre Gipfel zu enthüllen, während ihre Masse, bis in die Tiefen der Abgründe hinein, noch im Schatten lag. Ein Nebel schwebte, 3er zerschließ, und die Umrisse des Toten Meeres tauchten auf. 4Die Dämmerung, welche hinter Machärus heraufstieg, verbreitete eine Röte.

ここでは、下線部 3 の動詞は、前後の下線部 2 や下線部 4 の動詞と同じ過去形である。ここでは、フランス語の原文における単純過去が表す完了相と半過去が表す未完了相の違いは時制形式では表されていない。ドイツ語においては、完了相と未完了相の違いは、動詞の語彙的意味や文脈から理解される。そして、そのような完了相と未完了相の相違に関係なく、下線部 2 から下線部 4 まで、アンティパスが見たものを表す知覚の自由間接話法として自然に理解できる。つまり、完了相は知覚の自由間接話法と両立しうるのである。

Banfield (1981:67) は、フランス語の単純過去と半過去の対比と同じ対比が、英語にも見られるとしている。つまり、語りには過去形が現れるが、自由間接話法には過去進行形と進行形にできない状態動詞の過去形が現れる

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

としている。これに従うと、次の例の下線部は、動詞 *dashed* が過去形なので、語りだということになる。

- (81) 【ラングドンがカメルレンゴを追いかけていたが、カメルレンゴは階段の下へと消えていった。】

Langdon arrived breathless at the rim overlooking the sunken room. He peered down the stairs. At the bottom, lit by the golden glow of oil lamps, the camerlengo dashed across the marble chamber toward the set of glass doors that led to the room holding the famous golden box. (Dan Brown, *Angels & Demons*)

ラングドンは息を切らして下の部屋を見下ろすへりに着いた。彼は階段をじっと見下ろした。下では、オイルランプの金色の光に照らされて、カメルレンゴが有名な黄金の箱を保管している部屋に通じる一連のガラス戸に向かって、大理石の部屋を走って横切った。

しかし、これはラングドンが見たものとして自然に理解される。これも、知覚の自由間接話法であると思われる。

ここで、(78)の後に、単純過去の文を続けてみる。

- (82) 1Jean regarda dans la chambre par la fenêtre. 2Les murs étaient couverts de tableaux. Il y avait un lustre au plafond. 3Soudain, la porte s'ouvrit et un homme entra.

1 ジャンは窓から部屋の中を見た。 2 壁は絵に覆われていた。天井にはシャンデリアがあった。 3 突然、ドアが開き、男が一人入ってきた。

下線部 3 の動詞 *s'ouvrit* (開いた) と *entra* (入った) は単純過去であるが、ジャンが見たこととして解釈することができる。しかし、下線部 3 は、本当は出来事を描写しているだけで、文脈からジャンの知覚内容と解釈できるだけであると考えられることも可能であろう。しかし、その後に、さらに次のよう

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

に続けた場合はどうであろうか。

(83) Non, ce n'était pas un homme, mais une femme déguisée en homme.  
いや、それは、男ではなく、男装した女だった。

この場合、下線部 3 の「男が入ってきた」という叙述は、事実ではなくなる。そうすると、この部分は、語りではなく、ジャンが見たと思ったことを述べていたことになる。つまり、単純過去であっても、知覚内容を述べるのに使用できると考えられる。

知覚の自由間接話法は、フランス語に限らず見られるが、時制形式やアスペクトに関して決定的な制約はないようである。また、5.3 で見たとおり、知覚の自由間接話法が映画やマンガで見られる技法と共通の基盤を有するとするなら、個別言語の時制形式を超えた視点で捉え直すべきではないかと思われる。

## 6. まとめ

自由間接話法は、間接話法の伝達節を削除したものでも、(自由)直接話法と間接話法の両方の性質を併せ持つものでもない。むしろ、自由間接話法は、簡単に言うならば、自由直接話法の人称や時制を語り手の立場から選択しなおしたものである。それにより、登場人物の発話や思考を語りの中に断絶なく取り込むことができる。しかし、話法は截然と区別できるものではなく、自由間接話法も他の話法と連続的である。

自由間接話法の幾つかの問題についても論じ、以下のことを述べた。①まとめられた自由間接話法は、引用一般に見られる引用者によるまとめと同様のものと考えられる。②「二声仮説」と「語り手不在説」の対立は、「語りかけてこない語り手」を想定することによって、捉え直される可能性がある。③知覚の自由間接話法は映画やマンガの視線つなぎと共通の基盤を有すると考えられる。④知覚を述べるのに、フランス語の単純過去は排除されないし、

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

英語やドイツ語にも時制形式やアスペクトに関して決定的な制約は無い。

---

1 ただし、これは普遍的ではない。世界には、直接話法しかない言語もある (Aikhenvald, 2008: 415; Cristofaro, 2003: 46-47,108-109; Cristofaro, 2013)。また、直接話法・間接話法とは異なる原理に基づく話法のシステムを有する言語もある (Nikitina, 2012)。

2 自由間接話法についての議論は、特に小説に現れるものに集中してきた。しかし、実際には自由間接話法は話し言葉にも現れることが指摘されている (Fludernik, 1993: 83-84; 鈴木, 2005: 41-42)。しかし、本稿では、自由間接話法については主に小説に現れるものを扱う。

3 実際には、思考動詞や知覚動詞の後では時制の一致が見られる場合もある (Costello, 1961, Comrie, 1986: 294)。

4 ロシア語には大過去を表す時制形式が存在しないために、(i)の英文に対応するロシア語は(ii)のようになる。

(i) Kolya arrived; Marsha had already left.

(ii) Kolya priexal; Maša uže uexala. (Comrie, 1985: 68)

コーリャ 到着した マーシャ すでに 出発した

コーリャは到着した。マーシャはすでに出発していた。

ロシア語では、副詞 *uže* を用いることにより、マーシャの出発がコーリャの到着より前だったことを表している。

5 話者指示代名詞は、引用者が直示の中心で、被引用者を参照点として、その参照点と同一であるということによってターゲットとなる人物を指示している。このような指示のメカニズムは、過去未来や大過去と平行的である。過去未来や大過去においては、発話時点が直示の中心で、過去に参照点を置いて、その参照点より相対的に過去か未来であるということによってターゲットとなる時点を指示しているのである。

6 スペイン語では、命令を表す《前置詞 *a* + 不定詞》や否定命令を表す《前置詞 *sin* + 不定詞》のような定動詞を欠く不完全な文も、間接話法の従属接続詞の後に現れる (Rivero, 1994: 551)。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

---

7 新井（2001: 73）によると、半直接話法は *дескать* や *мои* など他者の引用であることを示す助詞がないと文法的には誤りとされている。

8 注1で述べたとおり、間接話法のない言語もある。

9 (41)には *Oedipus believed* という挿入節が付加されていて、自由間接話法としてよいか疑問がある（4.1 参照）。しかし、挿入節を除いても、*de dicto* 解釈しかないということは変わらないと考えられるので、論旨には影響ない。

10 ただし、ドイツ語の話法の歴史には、発話の話法が思考の話法に転用されたという考え方に合わない点がある。というのも、少なくとも19世紀までは、発話の再現には伝達節が欠如した間接話法が用いられ、思考の再現には体験話法が用いられるという使い分けがあったからである（鈴木、2005: 26）。

11 直接話法が元の発話を忠実に再現していなくても、やはり、話法の中で最も基本的なものであると考えられる。なぜなら、注1で述べた通り、間接話法を欠き、直接話法しか有しない言語が存在するからである。

12 ただし、Fludernik（1993: 100-101）は『アンナ・カレーニナ』のような小説では、時制を転換した自由間接話法が見られることを指摘している。

13 ただし、Toolan（2006: 699）によれば、倒置された挿入節は被伝達節の前でも可能である。

14 ドイツ語の伝達節を欠く間接話法と自由間接話法（体験話法）の違いについては、鈴木（2005: 26-31）を参照されたい。これについては、三瓶氏からご教示いただいた。

15 例えば、ウェールズ英語では、特に南（西）部において、ウェールズ語の影響でこのような語法が見られる（Bliss, 1984: 148; Penhallurick, 2004:104-105）。

16 フランス語でも、本来は直接疑問文に限られる *est-ce que*、*est-ce qui*、主語人称代名詞の倒置が、規範的でないとはされながらも、間接疑問文に出てくる例がある（Grevisse, 1986 : 682, 684）。

17 間接話法においては、通常、呼びかけは現れない。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

- 
- (i) The private answered, ‘Sir, I cannot carry out these orders.’  
(Banfield, 1982: 33)

「上官殿、その命令は遂行できません」と兵卒は答えた。

- (ii) The private answered that (\*sir) he couldn’t carry out these orders.  
(ibid.)

しかし、Toolan (2006: 699) は、現代の英語では間接話法の変異形があつて確固とした文法性判断は難しくなっていると述べている。

次の例では、下線文の間接話法に呼びかけが現れている。

- (iv) Ce n’était donc pas par des mots que j’étais parvenu à lui communiquer ce sentiment de beauté de la vie et d’adéquation au monde qu’elle ressentait si intensément en ma présence, non plus par mes regards ou par mes actes, mais par l’élégance de ce simple geste de la main qui s’était lentement dirigée vers elle avec une telle délicatesse métaphorique qu’elle s’était sentie soudain étroitement en accord avec le monde jusqu’à me dire quelques heures plus tard, avec la même audace, la même spontanéité naïve et culottée, que la vie était belle, mon amour. (Jean-Philippe Toussaint, *Faire l’amour*)  
それゆえ、私の前で彼女がそれほど強く感じる人生の美しさや世界への適合の感覚を、私は彼女に言葉によって伝えたのではなく、眼差しや行動で伝えたのでもなく、彼女へとゆっくりと向かっていった手のあの単純なしぐさの優雅さによって伝えたのだ。それは、あまりに隠喩に満ちた繊細さを持っていたため、彼女は突然世界とぴったりと一致したと感じて、数時間後には、同じ大胆さ、同じ無邪気で厚かましい率直さで、私に、人生って美しいわ、あなた、と言った。

被伝達節の動詞は時制の一致をして半過去になっているので、そこまでは間接話法であるが、**mon amour** という呼びかけは「彼女」の「ぼく」への一人称の所有形容詞を伴った呼びかけであり、直接話法のようにになっている。

次の例では、間接話法の途中で前言を修正している。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

---

(iv) « [...] Est-ce que vous connaissez Rocamadour ? » me demanda-t-il soudain, je commençais à m'endormir un peu, je lui répondis que non, je ne croyais pas, enfin peut-être que si, à la télévision.

(Michel Houellebecq, *Soumission*)

「[...] ロカマドゥールはご存知ですか」と突然彼は私に聞いた。私は少し眠りかけていた。私は彼に、いいや、知らないと思う、と言うか、多分、テレビで見たことはあると答えた。

je ne croyais pas (そう思わない) までは動詞も半過去になっていて、間接話法になっているが、**enfin** (と言うか) から前言を修正していきっており、実際の発話を再現するかのようになっている。

18 なお、「ここはどこか」は通常 *Where is here?* とは言わないので、*where here was* という言い方はありえないのではないかと思われるかもしれない。しかし、この *here* は、イタリックになっていることから分かる通り、前文の *here* を受けたものであり、そのために、*where here was* という表現が可能になっていると思われる。

19 この主張に続くその後の議論の展開については、三輪 (2014) の第 3 章を参照されたい。

20 視線つなぎの効果を実験的に検証した井上 (2006: 89) も、「男は見上げた」・「空には白い雲が浮かんでいた」と書けば、2 つの文からは「男が白い雲を見た」という解釈が成立するのではなかろうか」と、まさしく知覚の自由間接話法の例を挙げ、視線つなぎについての研究結果が文章表現の研究にも展開される可能性を示唆している。

21 なお、映画の POV ショットについては、その視点の主体が必ずしも感情移入の対象とはならないことが指摘されている。むしろ、POV ショットに写っている人物が感情移入の対象であることもある (三輪, 2014:148-149)。アメリカ映画『ホーム・アローン』(*Home Alone*) から例を挙げる。自分のせいで家族全員が消えてしまったのではないかと思ひ悩む主人公の少年が、教会に来てベンチに座ると、少し離れた席に座っている殺人鬼だと噂の老人

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

---

と目が逢う。すると、老人が立ち上がる。ここで、少年に近づいていく老人の視点からのショットが入る。しかし、この POV ショットで、観客が老人に感情移入するとは思えない。むしろ、そこに映っている怯える少年に感情移入するであろう。映像は、この点で、言語とは異なっている可能性がある。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。